

金子さんの思い出

住田 正一

金子さんは忙しい人に似合わず、よく手紙を書かれた人で、一寸した用件でも、使の者に持たせてよこされた。その一例だが、私にも、昭和十六、七年頃だが、こんなのが残っている。

拝啓 過般来色々とお世話様に相成り奉謝候 突然ながら昨今の木造船運用の計算は如何相成居り候や各社の分相分り候はば御取調べの上御聞かせ下され度願上候

草々

金子 直吉

住田 正一様

金子さんは大概手紙に金子直吉と署名された。しかし急ぐ時にはただKの一字をしたためた。その関係からこのKをもじって、俳句など詠んだ時に「片水」という俳名を用いておられる。「片」という字はKは片方だけの水だと云うことである。

金子さんといえば昔から俳句が得意であった。この人の俳句にも、よくその性格が出ていて、その時の気持が適切に表現されている。

雷鳴（かみなり）の跡に涼しき

青田かな

これは鈴木商店を整理してからの感想を詠んだものである。

またこんながある。

天正の矢叫びを啼け時鳥

これは愛媛県新居浜市外の金子山古戦場を安東直市君等と共に、訪

れた時の句である。金子山は金子さんの先祖金子備後守が主君長曾我部に殉じて、豊臣秀吉と戦って討死した所で、現在は市の公園の一部に取入れられている。右の句は金子さんの句の中でも、その時の感慨を詠んだもので、力がこもっている。最近関係有志が集まって金子山に句碑を建立したが、字は田宮嘉右衛門翁が染筆されたものである。

金子さんは俳句も作るが、また同時に間髪を入れず奇抜なユーモラスクをいう人であった。かつてある人が、お正月に金子さんの家へ行ってお餅を御馳走になった時に「あなたはお餅が好きですか」と訊ねたら金子さんは笑いながら「私は餅が好きだが、餅の中でもとり分け金持が好きです」と答えた。

金子さんの次男武蔵さんは現在東京大学文学部の部長で、ヘーゲル哲学を長く研究し、その著書『ヘーゲルの精神現象学』はかつて岩波書店から出版された。

その本が出来た時のことである。ふとそれを見た金子さんは、自分の息子の書いた哲学の本はどんなものであるのか読んでみようと思つて、最初の何ページかに目を通してみた。事業のことならどんなことでも判らないことはなかったであろうがいくら金子さんでも哲学の本は全然判らない。けれども、困難に会えば、益々努力する金子さんのことである。数時間ものもいわず一生懸命考えながら熟読してみたが、どうしても意味が通じない。

恰もその時は真夏のこと、金子さんは涼しそうな樹蔭に椅子を出して読んでいたのであるが突然女中を呼んで、紙と硯を持って来させ蝉啼くや 樹下の親爺 つんぼなりと書かれた。耳の遠い金子さんにふさわしい句である。

その後暫くたってから、その本の前後のことを知らない私に「君に

東京ステーションホテル

二〇一号室の住人―金子直吉

「大戦ブーム」のなかで華やかに活躍した企業家の一人に、鈴木商店の金子直吉がいる。彼は、東京ステーションホテルのスイートルーム二〇一号室(現在の二〇二号室と二〇四号室)を年間契約で借り切り、活動の場としていた。

城山三郎の小説『鼠』のモデルにもなったこの金子直吉をとおして、『暴騰期大正』をみてみたい。金子は慶応二年、土佐の生まれ。神戸の貿易商鈴木商店の子飼いの番頭として、「お家さん」と呼ばれる店主の鈴木よねに仕えた。明治三二年に台湾樟脳専売法が發布されると、この機をのがさず台湾に渡り、民政府長官の後藤新平にとりいって台湾産樟脳の六十五%の販売権を得た。これが鈴木商店発展の契機となり、以来、店の主導権は金子の握るところとなった。時に三五歳であった。

この成功を機に、店の規模を拡大し、人材を迎え入れ、大里製糖所の建設を皮切りに、製鋼、製塩、毛織物、製粉、酒精など広範囲に手を伸ばした。こうした折、第一次世界大戦が勃発したのである。開戦と同時に金子は、鉄鋼、船舶、軍需物資はもとより、あらゆる物資を全資力、全信用力をあげて買い占め、世界的な大投機を試みた。彼がロンドン支店長の高畑誠一(のち日商会長)に買占めを指令した文面には、こうあった。「この戦乱の変遷を利用した大儲けをなし、三井三菱を圧倒するか、しからざるも彼等と並んで天下を三分するか、これ鈴木商店全員の理想とするところなり。小生共これがため生命を五年や十年短くするも、いささかもいとう所にあらず」



六甲アイランド (六甲山上より写す)

金子の思惑は当たった。大正八、九年の最盛期には、鈴木商店の取扱高は年間一六億円、三井をしのぐ勢いとなり、関係会社六〇余社、総資本金五億六〇〇万円と優に財閥の威容を備えるにいたったのである。

しかし、大戦終結後の大反動と、つづく関東大震災のショックは決定的だった。金子の死力を尽くしての工作も、所詮は数年の延命策でしかなかった。昭和二年の金融大恐慌は、この鈴木商店の破綻が引き金となった。

金子直吉は事業の鬼ではあったが、私心私欲なく、資性廉直な士であった。金子の部屋二〇一号室には、日銀総裁の井上準之助や松方幸次郎などが集い、さながら政財界人のサロンの観を呈した。金子はVIPにありがちなわがままもなく、ボーイ達にも気をつかい、当時の従業員の誰に聞いても、「顧客ナンバーワンに金子の名をあげ、「ほんとうに、よいお客さまでした」という。

鈴木商店はつぶれても、神戸製鋼所、帝人（現在のテイジン）、日商（現在の日商岩井）など、事業は残った。

そして金子は、事業とともに人材を世に送った。田宮嘉右衛門（神戸製鋼所社長）、依岡省輔（神戸製鋼所専務）、大屋晋二（帝人社長）、永井幸太郎（日商社長）、高畑誠一（日商会長）、賀集益蔵（三菱レーヨン社長）など、のちの財界を背負った人々は、金子に育てられ、金子に磨かれた人たちである。

日本ホテル(株)発行八十年史

「東京ステーションホテル物語」より

一九九五年十一月二日刊

が初めての「学校出」の社員ということでも、大体的見当はつく。それまでは、神戸、横浜などの外人商館あがりの番頭が店の働き手になっていた。

入社と同時に私は、当時神戸市生田区北野町にあった会社の独身寮に入った。この独身寮は元オリビアという名前のホテルだったのを鈴木が買い取ったものだ。そのころ鈴木商店の本店は、同じ生田区の栄町にあった。この本店へは寮から朝晩、歩いてかよった。当時は朝、昼、晩の三食とも本店で食べるようになっており、朝食は八時半までに本店に入らないと食べさせてもらえなかった。普通、寮から店までは歩くと二十分以上かかったが、朝はいつも十分そこそこでかけつけたものである。

当時、寮には二、三十人が住んでいたと思うが、寮住まいの者が交代で鈴木商店の主の鈴木よね宅に、宿直に行ったものである。当時、鈴木よね宅は、栄町の会社に近いところにあった。私が鈴木に入社した年の六月末か七月の初めのことだと思う。鈴木よね宅へ入社後、初めて宿直に行った。その晩、型通りのことをすませて、寝室に引き揚げたところ、すでに蚊の出る季節なのに、蚊帳のしたくがなかった。私は蚊が大きらいだった。

私はそのとき「困るなあ」ぐらいのことを言ったのだろう。ところが、あとで聞いてみると、私が女中さんに強く文句を言ったというふうに鈴木家の人たち全員に伝わっていたらしい。「今度入った学校出の高畑という男はひどくうるさいやつだ」ということになっていったという。のちに私は、鈴木よねの孫娘の千代子と結婚することになるのだが、何回か鈴木家には宿直に行ったが、一度も顔を合わせたことはなかった。

私の履歴書

高畑 誠 一

鈴木商店に入社 気難しい上司の下へ

「学校出の英語」信用されず



神戸高商の水島校長の勧めで、鈴木商店に入社したことは前にも触れた。水島校長は鈴木商店の番頭の金子直吉さんと前から交際があったらしい。その金子さんから「鈴木商店の貿易部門を拡大したいから、だれか適当な卒業生を紹介してほしい」と水島校長に頼まれていたようだ。

私は神戸高商在学中は、できれば三井物産に入りたいと考えていた。三井物産を志望したのは、当時貿易商社としては三井物産が抜きん出た存在だったからで、どうせ働くなら一流のところがいいと考えたからに過ぎない。そんなわけで、三井物産志望といったところで、まだ漠然としたものだった。そんな状態のところへ、鈴木商店を紹介されたわけだ。尊敬する水島校長の推薦ということで、すぐに金子直吉さんの面接を受けた。金子さんからは、学校のことや郷里のことなどを簡単に聞かれた程度で、その場で採用が決まった。あっさりしたものだ。

私が入社した明治四十二年三月、当時の鈴木商店は、しょうのう、はっか、麦粉、外米、砂糖などを扱っている小さな貿易商だった。私は「学校出の英語」として配属された。上司の通信係主任は、外人商館番頭出身の上田貢太郎さんという人だった。この上田さんは、号を観水といい、社内では観水さんといった方が通じやすかった。この観水という号は「何をくよくよ川端柳、水の流れを観てくらす」という端唄からとって付けたものだそうである。

観水などという名前からすると、さだめし粋でくだけた人のように思われるが、実際の観水さんは、大変な気難し屋だった。だからこの変人のもとで三ヶ月としんぼうしたものがいない、といわれたくらい気難しい人だったのである。ずっとあとで気がついたことだが、当時金子さんは初めての学校出として採用した私の人間をためすつもりで、いきなり鈴木商店でも一番気難しいといわれる観水さんのもとへ私を配属したのではないかと思う。

私の割り当てられた外国通信係というのは、海外の取り引き先との電信連絡の窓口の役割を果たしていた。当時、海外から入ってくる電文はほとんど英文だったが、これを翻訳し、社内各部署から出す電文の内容をチェックするというのが主な仕事だった。

私が英語を習い始めたのは、小学校一年生のころで、その後高商を卒業するまでの十七年間、他のどの学科よりも英語の勉強に力を入れてきた。それだけに鈴木商店に入社したときは、どんな英語でもすぐにこなせる自信を持っていた。しかし観水さんは「学校出の英語なんか」とばかりして、まともな仕事は私にさせてくれなかった。

金子さんのこと 生産部門にも進出

鈴木商店を大きく伸ばす

三井、三菱と天下を三分しよう——とは、今から考えてみても随分、